【エッセイ】

華麗なるハプスブルク帝国――その永遠の光芒（三）

「女帝」マリア＝テレジア、誕生！

富山典彦

一七四〇年十月二十日、皇帝カール六世が死んだとき、マリア＝テレジアはまだ二十三歳の若さだった。もちろん、この時点でマリア＝テレジアはすでに三人の子どもを産み、四人目は妊娠中だったから、十代の頃とは違う。とはいえ、父親の死は衝撃であったし、妊娠中だったため、父親の死の床に寄り添うこともできなかった。そして、国事詔書にしたがって、マリア＝テレジアのか細い両肩に、ハプスブルク家の広大な家領がのしかかってきたのである。

しかも、マリア＝テレジア自身は、いわゆる帝王学を学ぶ機会もないままに、燃える初恋を成就させて間がなかった。十八世紀もいよいよ後半にさしかかり、ハプスブルク帝国でも、先代の父カール六世も、先々代の伯父ヨーゼフ一世も、内政改革に取り組みはしたが、いまだその成果があがっているとは言えなかった。

とはいえ、ある程度の官僚組織はすでに存在していたが、その組織の面々はたいてい、祖父である皇帝レオポルト一世の時代から宮廷に仕えている老人である。かつて「若き宮廷」のリーダーであったプリンツ・オイゲンも、この時すでに不帰の客となっていた。

ハプスブルク家の家領を一身に継ぐことになったマリア＝テレジアは、そのための教育を受けていなかったが、未

来の皇帝ヨーゼフ二世を宿していた彼女は、父親の死の数時間後には、喪服に身を包んで宮廷の人々の前に立った。宮廷大臣ジンツェンドルフ伯爵に紹介されたあと、マリア＝テレジアはこれに謝意を示し、続いて、この非常時にあって、惜しみない協力を要請した。ともかく、君臣一体となって、この難局を乗り越えるしかない。

ハプスブルク家は、皇帝在位中に息子をローマ＝ドイツ王に選出させておいて、その死後ただちに王である息子が神聖ローマ皇帝になるというシステムを構築していたが、男系の絶えたハプスブルク家には、もうこのシステムを維持することは不可能になっていた。

では、いったい誰が神聖ローマ皇帝になるべきか。「女帝」として知られるマリア＝テレジアだが、女性は皇帝になることはできない。だからこの「女帝」は、マリア＝テレジアに付けられたあだ名と解すべきだろう。しかし、ハプスブルク家の家領を相続し、最終的にシレジアの大部分をプロイセン王フリードリヒ二世に奪われたものの、なんとかその国家的統一に向けて努力した功績からいえば、文字通りハプスブルク帝国の「女帝」と言っていいだろうが。

とはいえ、神聖ローマ帝国の皇帝には、誰がなるのか。フリードリヒ三世が皇帝在位中に息子のマクシミリアンをローマ＝ドイツ王に選出させて以来、ハプスブルク家はこのシステムを活用して、選挙で選ばれる皇帝位をほとんど世襲のように独占してきたが、いよいよそれが終わってしまう。まず名乗りを上げたのは、バイエルン選帝侯カール＝アルブレヒトであった。

一七二二年に彼は、マリア＝テレジアの従姉マリア＝アマーリエと結婚するに際して、相続を放棄していたはずだが、もちろんそんなことは無視して当然、そもそも、いずれは皇帝になれる、いやなんとしてでも皇帝にしようという意気込みで、ミュンヘンで婚礼の盛大な祝祭が行われていたのだから。

そして、ここでもまた割り込んでくるのが、フランスのブルボン家ということになる。太陽王ルイ十四世の時代から時はルイ十五世の時代に移っていたが、基本姿勢はどうやら同じであるらしくて、早速バイエルン側に肩入れする。王の側近フルーリ枢機卿はここで、「もうハプスブルク家はない」などという名言を残している。

十二月六日、聖ニコラウスの日、この日には、司教の祭

服を身にまとった聖人ニコラウスが子どもたちのところに訪ねてきて、「良い子にしていたか」と尋ねる。「はい」と答えると、袋からお菓子を取りだして手渡してくれる。しかし、嘘をついたら大変だから、ついつい「いいえ」と正直に答えてしまうとさあ大変、『ドイツ民俗学小辞典』[1]ではループレヒトとあるが、ウィーンではクランプスと呼ばれている小鬼に、束ねた芝で叩かれてしまう。

ちょうどこの日に、「大王」と異名をとるプロイセンのフリードリヒ二世は、マリア＝テレジアとその夫フランツ＝シュテファンに心のこもった手紙を出していた。かつては、ハプスブルク家のこの美しい跡取り娘の花婿候補の一人としてその名を挙げられたこともあった大王は、フルートの名手としても知られているが、父を亡くしてさまざまな重圧を一身に引き受けなくてはならないプリンセスに精一杯の愛情を示したのだろうか。しかし、この手紙がベルリンからウィーンに届けられている最中に、なんとフリードリヒ大王は、シレジアを手に入れるための軍を送っていたのである。聖ニコラウスの顔とクランプスの顔、まさに二つの顔というところである。

フリードリヒ二世の狙いはもちろんシレジアの獲得にあり、この要求はすでにマリア＝テレジアによって拒否されていたのだが、どうしても諦められなかったということであろう。年が明けて一七四一年一月三日には、シレジアの首都ブレスラウが無血占領されている。プロイセンの奇襲の成果だが、もちろんハプスブルクも即座に反撃に出るものの、四月十日にモルヴィッツで敗北を喫している。

国際情勢をみると、巨大化したハプスブルク帝国を、この機に粉砕して分け前にありつこうという方向性が見て取れる。こうして、宿敵フランスはバイエルンとスペイン、シレジアを狙うプロイセンはフランスとバイエルン、こういう奇妙なふたつの反オーストリア同盟が成立する。

ハプスブルク帝国とは、いくつもの王国・侯国・公国・伯領などの集合体であるが、なかでも重要なのが、オーストリア大公国とハンガリー王国、それにボヘミア王国である。ちなみにこの「大公」は、原語ではErzherzogというが、ハプスブルク家最初の皇帝にしてローマで戴冠した最後の皇帝フリードリヒ三世（一四一五～一四九三）が、帝国諸侯に認めさせたハプスブルク家のみの称号である。これを考案したのは、ハプスブルク家が帝国のリーダーから排除されていた時代に、「建設公」と言われ、ウィーン

の中心にそびえる聖シュテファン大聖堂に眠るルドルフ四世公である。ルドルフ四世（一三三九～一三六五）からフリードリヒ三世まで、なんと百年もの時間が流れすぎているということから、ハプスブルク家の息の長さがうかがえる。

ハンガリーは、この同じ年の六月に、マリア＝テレジアを自分たちの王国の君主、すなわち女王として認め、プレスブルクで戴冠式をすることになった。プレスブルクとは、現在はスロバキアの首都ブラティスラヴァで、ウィーンからドナウ川を下ること一時間あまりの場所にある。

もっとも、これに先だってマリア＝テレジアは、ハンガリーにこれまでのすべての特権を認めるとともに、さらに格別の計らいをすることを約束している。ハプスブルク帝国の歴史全体をざっと眺めてみたとき、ハンガリー王国とボヘミア王国とでは、その点がおおきく異なっている。ハンガリー王国には特権を認め、ボヘミア王国は弾圧する。ボヘミア王国が神聖ローマ帝国に含まれているのに対して、ハンガリー王国はその外に位置していることも、この差別の重要な根拠であるにちがいない。ハプスブルク帝国の最後の姿は、世界史の教科書にも出てくるように、オーストリア＝ハンガリー二重君主国であり、チェコ人が要求したオーストリア＝ハンガリー＝ボヘミア三重君主国はついに実現しなかったのだから。

戴冠式は、六月二十五日に行われた。ハンガリー貴族の第一人者エステルハージー伯エメリヒがマリア＝テレジアを出迎える。ハンガリー女王となったマリア＝テレジアは戴冠の丘で、聖シュテファン、ハンガリー語でいうと聖イシュトヴァーンの剣を四方に振り、この国をいかなる敵からも守るという誓いをする。ただし、マリア＝テレジアの夫であるフランツ＝シュテファンは、残念ながら共同統治者としては認められず、マリア＝テレジアが単独でこの王国の女王になる。

しかし、このときプロイセンが宿敵フランスと同盟したという知らせを受け、ハンガリー女王マリア＝テレジアは、急遽ウィーンに帰還する。まだほとんどなにひとつ片がついていない現状では、プロイセンの求めるシレジアを放棄するのがよかろうと、大臣たちは助言する。それというのも、七月三十一日には、バイエルン軍が国境の都市パッサウを占領し、オーストリア継承戦争が始まったからである。もう一人の継承権者であるザクセン選帝侯も、八

月三十一日には反マリア＝テレジアを宣言する。シレジアを狙うプロイセンに、従姉たちの嫁ぎ先であるバイエルンとザクセン、そしてその背後には宿敵フランスもいる。まさに四面楚歌、いや、ハンガリーが敵に回ったわけではないので、三面楚歌というところだろうか。

これを受けてマリア＝テレジアは、ふたたびプレスブルクに出向く。その年の九月十一日のことであった。このときのマリア＝テレジアは、ハンガリー王の印である聖シュテファンの王冠を頭に載せ、父を亡くした故の喪服を身にまとっていた。ハンガリー議会の面々に対してマリア＝テレジアは、目に涙を浮かべながら、こう宣言する。

「ハンガリー王国、われらが臣民、われらが子どもたち、われらが王冠のために。すべてを投げ打ち、忠実なハンガリーの人々とその勇敢さに助けを求めます。今やわれらが立たされているこの大きな危機のなかで、子どもたちのため、臣民たちのため、そして帝国のために、すべてをなすことをお願いいたします。」

このときの絵が残っているが、マリア＝テレジアの腕には、男の赤ん坊が抱き締められていた。それはもちろん、のちの皇帝ヨーゼフ二世である。ハンガリーの議会はこの演説に感激し、ハンガリー独特の剣を振り上げてそのアジテーションに応じる。パルフィ伯ヨハンをはじめ、ハンガリーの大貴族であるマグナートたちは、「わが君のために、わが命と血を！」と叫び声をあげる。

もちろん、叫んだだけではなく、なんと十万もの兵を出すという約束がされ、とりあえずは四万の兵が戦地に赴く。自分たちの力があってこそのハプスブルク帝国ということだから、マグナートたちは勝利の感情に酔い痴れたという。フランツ＝シュテファンもこのときようやく、女王マリア＝テレジアの共同統治者として認められる。

一方、バイエルン軍は、パッサウからドナウ川下流へと軍を進め、オーバーエスタライヒの首都リンツを占領する。ここは、フリードリヒ三世が晩年を過ごしたところであり、オーストリア大公国の西半分である。バイエルン選帝侯カール＝アルブレヒトは、この地の等族[2]により、オーストリア大公の称号を認められる。以前にも似たようなことがあったが、オーストリアの等族ほど当てにならないものはなく、勝手に自分たちの君主を取り替えてしまうのである。

一方、プロイセン軍もシレジアからモラヴィアに侵入

し、オルミュッツ、チェコ語で言えばオルモウツを占領する。現在のチェコ共和国は、ボヘミア王国とモラヴィア辺境伯領を合わせたものだが、ボヘミアよりもモラヴィアはオーストリアに近い位置にある。ここに侵入されたということは、ハプスブルク家にとっては喉元に匕首を突きつけられたようなものである。

プロイセンがモラヴィアに侵攻しているあいだに、オーストリア大公となったバイエルン選帝侯カール＝アルブレヒトはボヘミアに行き、十二月九日、ボヘミアの等族からボヘミア王に選ばれる。すでに述べたように、ハプスブルク帝国には、オーストリア大公国、ハンガリー王国、ボヘミア王国という三本の柱があるが、そのうちの二本を奪われてしまったということになる。

マリア＝テレジアは、必死の思いで味方につけたハンガリーの兵を引き連れて、バイエルン、さらにその向こうにいるフランスとの戦いに全力を投入する。ハンガリー王国の共同統治者として認められた夫のフランツ＝シュテファンは、ケーヴェンヒュラー伯ルートヴィヒにオーストリア軍を託し、プロイセンとの戦いのためモラヴィアに向かう。

年が明けて一七四二年一月二十三日から二十四日にかけて、マリア＝テレジアの檄を受けたハンガリー軍は、バイエルンからリンツとパッサウとを奪還する。ドナウ川とイン川とが合流するパッサウまで来れば、バイエルンの首都ミュンヘンはそう遠くはない。オーバーエスタライヒの等族からはオーストリア大公、ボヘミアの等族からはボヘミア王として認められたとはいえ、カール＝アルブレヒトはこの時点で、これらの地域から追い出されている。ただ名前だけの大公であり王である、ということになる。プロイセンに占領されているシレジアを除けば、ハプスブルク家はその家領をほぼ取り戻したわけである。

あとは、名義のみとはいえ神聖ローマ皇帝だが、フランスはなんとその同じ一月二十四日に、フランクフルト・アム・マインでバイエルン選帝侯カール＝アルブレヒトを無理矢理ローマ＝ドイツ王に選ばせた。そしてそれに引き続いて二月十二日には、カール＝アルブレヒトを、その同じフランクフルトでローマ皇帝カール七世として戴冠させている。戴冠式のためにアーヘンまで出向くことはできなかったとはいえ、フリードリヒ三世以来事実上この皇帝位を世襲化してきたハプスブルク家にとって、覚悟はしてい

ただろうが、このままで済ませることのできない非常事態となった。

しかしながら、リンツとパッサウを奪い返されたその日に、本拠地ミュンヘンを出て、どうしてフランクフルトまで出かけたのだろうか。マリア＝テレジアの背後には、勇猛果敢なハンガリー軍がついている。フランスが力任せに自分を皇帝に推挙してくれたとしても、帝国諸侯がマリア＝テレジア相手に戦ってくれるはずもない。戦いがまだ決着していないのに、本拠地を留守にすることのリスクを、カール＝アルブレヒトは理解していなかったということだろうか。この戴冠式の二日後、すなわち二月十四日には、ミュンヘンをオーストリア軍に占領されている。カール七世は、神聖ローマ皇帝の帝冠を捧げ持って、いったいどこへ帰ればいいのか。

もっともハプスブルク側も、マリア＝テレジアの夫にしてハンガリー王国の共同統治者フランツ＝シュテファンは、どうやら戦争向きではなかったようで、五月十七日にコトヴィッツでプロイセン軍に敗退している。とりあえずここでプロイセンと和睦をすることが、バイエルンとフランスの同盟に対する最良の策と考えられた。フリードリヒ二世にしても、そろそろ財布の中身が心配になってくる頃で、ここは取り急ぎ和議を結ぶことこそが、双方の一致した結論となる。

七月二十八日に、ベルリンで和平条約が結ばれ、プロイセン王フリードリヒ二世はシレジア王を兼ねる。ただし、ハプスブルク家としても、シレジアのすべてを手放すことはできず、シレジア公とグラッツ伯はマリア＝テレジアとその子孫のために保持され、トロッパウやテッシェンも、オーストリア＝シレジアの都市としてハプスブルク家に残される。とはいえ、和議はいつも暫定的なもので、このままで終わるわけではなく、シレジアをめぐっては、オーストリア継承戦争後にまた、「女帝」と「大王」との間で熾烈な戦いが繰り広げられるが、それはまた別の機会に譲ることにしよう。

九月十一日には、継承戦争の「権利者」の一人であるザクセン選帝侯も、このベルリン条約に加わる。神聖ローマ皇帝を、自分の妻の妹の婿に奪われたのだから、これ以上バイエルンに荷担することはあるまい、と考えたのだろう。

フランツ＝シュテファンは、軍事的無能力をさらけ出し

てしまったが、そういう場合に限って、有能な弟がいるものである。ナポレオン戦争時代の皇帝フランツ二世の弟カール大公しかり、わが国では征夷大将軍源頼朝の弟源義経しかり、ということである。このときは、フランツ＝シュテファンの弟ロートリンゲン公カールであった。ロートリンゲンの領地そのものは、マリア＝テレジアとの結婚により失われてしまっているが、ロートリンゲン公という名前だけは保持されていた。

フランスも、はるばるボヘミアに軍を進めていたものの、この情勢に鑑みて、即座に撤退する。さすが目先の利くフランスと褒めるべきかもしれないが、ここで功績のあったのが、このロートリンゲン公カールである。フランス軍から解放されたボヘミア王国は、もともとはハプスブルク帝国の大事な三本柱の一本である。一七四三年四月二十九日、マリア＝テレジアは戴冠のためにボヘミアの首都プラハへと赴く。五月十一日にボヘミアの等族により、プラハのフラチーン城に迎えられ、翌日には戴冠式が行われる。こうして、マリア＝テレジアは、ハンガリー女王に次いで、ボヘミア女王になったのである。あとは、なんとかして夫を神聖ローマ皇帝にするだけである。

そこへ、ロートリンゲン公カールがブラウナウで勝利したとの知らせがもたらされる。一ヶ月後にカールがウィーンに帰還したとき、ハプスブルク家の一員として熱狂的に迎えられる。マリア＝テレジアにはマリア＝アンナという妹がいたが、カールとこの妹は、翌一七四四年一月七日に、アウグスティーナ教会で結婚式を挙げる。ハプスブルク家とロートリンゲン家に、こうして二組の夫婦が生まれるが、その幸せは長くは続かず、その年に妹は死に、カールはネーデルラント総督として、その身も心も生涯に渡って、ハプスブルク家とその亡き妻に捧げるのである。

一方、その後の国際情勢はというと、フランスに敵対するイングランド、オランダ、ハノーファー、ヘッセン、それにオーストリアを加えた「国事詔書軍」が結成され、イングランド王ジョージ二世は、ゲッティンゲンでフランス軍に勝利する。しかし、フランスもこのまま引き下がることなく、三月二十六日には正式に宣戦布告して、この連合軍に対峙する。しかし、これまで正式に宣戦布告せずに戦ってきたのかと思うと、少し妙な気がするが、まあそれがフランスのやり方ということなのかもしれない。

かつてのプリンツ・オイゲンのように、新婚のロートリ

ンゲン公カールは、七月二日には、フランスがドイツとの国境と考えているライン川を渡り、フランス軍を追撃し、故郷ロートリンゲン、フランス語で言うとロレーヌの近くにまで軍を進める。できればこの地をふたたびわが手に取り戻したいと、カール公は思いをはせたことだろう。

六月五日にフランスと同盟していたプロイセン王フリードリヒ二世は、オーストリアのこの躍進に恐れをなして、七月二十四日には神聖ローマ皇帝カール七世とも同盟するが、結局ボヘミアから撤退し、カール七世はついに孤立無援の身となって、ミュンヘンから逃亡する。

そして翌一七四五年一月二十日には、この流浪の皇帝カール七世が死去し、ふたたび神聖ローマ皇帝位は空位となる。カール七世はバイエルン選帝侯だったから、ヴィッテルスバッハ家としては、なんとしてでもこの領国を守らなくてはならない。カール七世の息子であるマクシミリアン三世＝ヨーゼフは、フュッセンの和議をハプスブルク家と交わし、一度は反故にしていた国事詔書を承認するかわりに、一七四一年当時の国境に戻し、バイエルン選帝侯国はもとの状態に戻る。

ミュンヘンから南へ下ったフュッセンは、ローマへの道ロマンティッシェ・シュトラーセのドイツでの終点であり、ここに建つホーエンシュヴァンガウ城は、筆者が観光バスでこの地を訪れたとき、バスガイドの話が事実であれば、今でもヴィッテルスバッハ家の所有である。しかし、ここに来てなんといっても目立つのは、この地味な城ではなく、反対側の高い山の上に立つ、ノイシュヴァンシュタイン城であろう。のちに王国となったバイエルンの国王ルートヴィヒ二世が、白鳥の騎士を夢見て建てた華麗な城で、日本の富士山のように、ドイツ観光の象徴のような存在になっているが、もちろんこのときにはまだこの城は存在していなかった。

さて、次の皇帝は誰か。フリードリヒ二世は、当然のことながら皇帝になることを夢見ていただろうが、それは断念せざるをえなかった。「国事詔書」をふたたび認めたザクセン選帝侯でもないとすれば、残るはハプスブルク＝ロートリンゲン家のフランツ＝シュテファンということになる。九月十三日、ついにこのマリア＝テレジアの最愛の夫は、ローマ＝ドイツ皇帝に選ばれる。神聖ローマ皇帝フランツ一世の誕生である。

こうして、ハンガリー女王でもありボヘミア女王でも

あった二八歳のマリア＝テレジアは、夫の戴冠式のためにフランクフルトへと向かう。これが国外に出る最後の旅になったということだが、九月二十五日、滞りなく戴冠式が行われ、ハプスブルク家、いや、ハプスブルク＝ロートリンゲン家に帝冠が戻ってきたのである。

マリア＝テレジアは、神聖ローマ皇帝フランツ一世の妻として皇帝妃ということになるが、事実上は「女帝」として、広大なハプスブルク家の家領、ハプスブルク帝国を支えていくことになる。

ただし、オーストリア継承戦争それ自体はこれで終結したわけではなく、最終的には、一七四八年十月十八日のアーヘンの和平を待たなくてはならない。もちろん、シレジアをめぐるプロイセンとの戦いは、いよいよ熾烈なものになっていくであろう。

注

（1）谷口幸男他『図説・ドイツ民俗学小辞典』同学社、一九八五年。

（2）「等族」とは何か。筆者も、かなり以前にこの時代の歴史を扱う日本語の本を読んでいて、疑問に思ったが、その後ドイツ語の本でStändeという原語に出会って、その意味が解けた。もっとも筆者自身は歴史研究者ではないので、正確にこの語の意味内容を理解しているとは言えないが、Standの複数形ということだから、「諸身分」とでも訳せばだいたいのことは理解できる。中世以来のヨーロッパの身分制社会において、ある地域を実効支配していた「諸身分」、例えば聖職者や大土地所有者や都市の有力な市民などを指していると考えていいだろう。ハプスブルク帝国と呼んでいるものの実態は、ハプスブルク家の家領の集合体で、それぞれの家領にそこを実効支配する等族がいて、これらの等族がその家領の領主を選ぶ権利を保持していたのである。ハプスブルク帝国の歴史をたどっていると、ある地域の等族が、別の家の貴族をその地域の領主、例えばボヘミア王国ならばボヘミア王に選ぶ、ということが起こっている。ハプスブルク研究者として名のある大津留厚氏に直接聞いたことであるが、マリア＝テレジアの父カール六世の「国事詔書」は、ハプスブルク家の全家領の等族に領主を選ぶ権利を留保しつつ、ハプスブルク家の長子をその権利を行使して選ぶよう取り決めたものである、とのことである。